

## 矢作川河道の変遷

矢作川は、長野県、岐阜県および愛知県を流れ三河湾に注ぐ河川である。矢作川の水は明治用水などに使われている。矢矧川とも書く。長野県下伊那郡平谷村の大川入山に源を発して南西に流れる。岐阜県恵那市と愛知県豊田市の奥矢作湖周辺では、矢作川が県境を決めている。流域に豊田市、岡崎市、西尾市などがある。下流域にある矢作古川は元の本流であり、氾濫を抑えるため江戸時代初期に、新たに開いた水路が現在の本流となっている。愛知県碧南市と西尾市との境で三河湾に注ぐ。

矢作川流域は、6市12町7村からなり、流域内には約69万人（1995年）の人々が生活しており、治水対策や明治用水の整備等により、自動車産業を中心として発展した豊田市、「日本のデンマーク」と呼ばれるほどの優良農村等を中心として発達した安城市や岡崎市、西尾市、碧南市を中心とする西三河地帯一帯の主要地区を包含し、社会・経済・文化の基盤を成している。

かつて矢作川は、15世紀中頃までは、自然の流れのままに幾筋もの流れがあった。また、流域は風化したもろい花崗岩から形成され、多量の土砂が流れ込み、天井川となっていたために、中・下流でたびたび氾濫し、流れを変えていたと言われている。

矢作川の特徴として、流域の地質の大半が花崗岩質のため、典型的な砂河川となっている。時代が、高度成長期に入ると、矢作川でもコンクリートの骨材として砂利採取が盛んに行われていた。これに伴い河床低下が続き、護岸の補強が必要となり、河床低下に柔軟に対応できる、粗朶沈床や柳枝工などの伝統工法が積極的に活用されてきた。現在では、水辺の多様性や親しみやすい景観を育むことにも一役買っている。

記録では、1399年に、今の岡崎市に六名堤が築かれたのが治水事業の始まりで、1452年～1455年の間に、西郷弾正左衛門が岡崎城の築城にあわせ堤防を築き、流れを固定させた。その後、徳川家康が1605年に米津清工門に命じ、下流部の台地を開削し、今の矢作古川から川を付替え、現在の矢作川の川筋が概ね出来上がった。

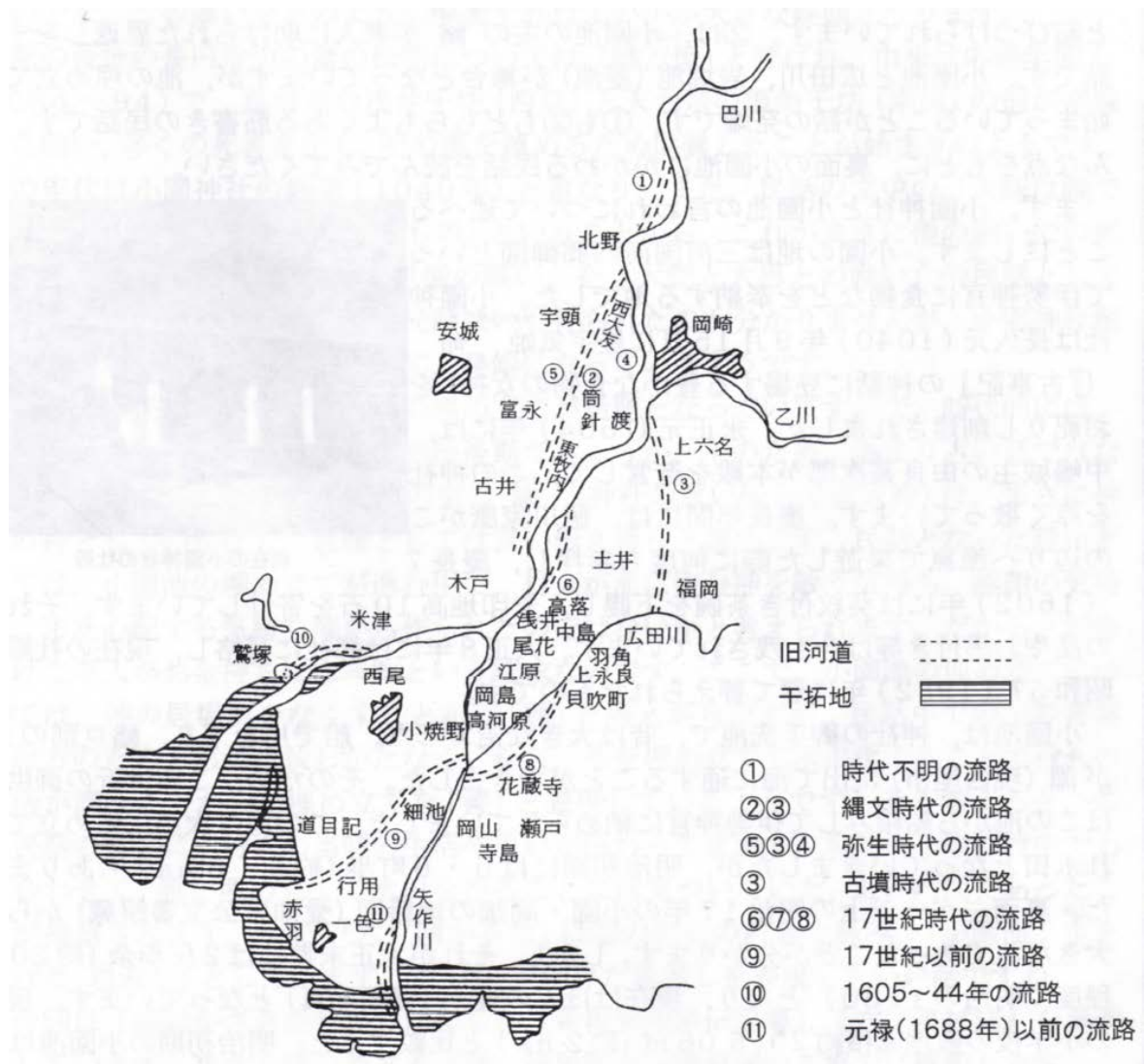


しかし江戸時代の矢作川は水害との戦いでもある。堤防決壊、修復のための普請は小規模の場合は村請け、藩が金を出すのが藩自普請、幕府頼みが国役普請に分かれる。流域の藩と住民は度重なる洪水で江戸に陳情するが、幕府も財政難でなかなか許可が下りなかった。止む無く藩で堤防の修復をくりかえすことが多かった。藩を超えて、また旗本などの知行地が多いところで、住民が代表を江戸勘定奉行所に送り、堤防の普請だけでなく川底が1~2m上がっているのを川の浚渫を何回となく直訴していた。これは村を越え、藩を超えて浄土真宗の講が組織化されていて、今様の住民運動の展開がやり易かったこともあると思われる。決壊のつど空き俵、縄、木杭さらに土嚢を用意し、土方人足を何万人と集めるのは至難のことだった。そのため、運命共同体の意識が水害のたびに醸成され、今様の三河独特の耐え忍ぶチームワークができたと考えられる。明治以降でも矢作川流域での堤防決壊は100回を超える。江戸時代はさらに多くの水害の歴史、水との戦いがあった。明治に入り碧海台地に明治用水が開削され、拳母台地に枝下（しだれ）用水が開削され矢作川の水の有効利用が図られるとともに日本のデンマークと称される先進的農業が勃興することになる。

旧碧海郡の中で、六ツ美村だけが矢作川の東側に位置している。その原因は矢作川が古くから、河道を変遷させてきたことが原因のようである。もともと六ツ美と桜井等の地域とは弥生の昔から陸続きであり、深いつながりを持っていたようである。

矢作川は縄文・弥生時代から14世紀頃までは、現在の本流の東側を流れていた。現在の八帖付近で大きく東に曲がり天白から法性寺・宮地を通り六ツ美の東側を流れており、占部川・廣田川が河道であったようである。この頃の矢作川はきちんとした堤防がなく、大雨が降ると六ツ美のような低いところは全体が川になっていたようである。水が引いてもあちこちに水たまり（湖）が出来たままであった。また、上流からの土砂の運搬量が多かったため、川底が次第に高く天井川になり、常に低いところに水が流れるため河道が変遷した。高いところや川の岸などに粗砂が寄せられて自然堤防が出来たようである。

年 代	矢 作 川 の 河 道 の 変 遷
縄文時代 弥生時代	河道は ◇渡 → 東牧内 ◇六ツ美の東側 河道は ◇西大友 → 西本郷 → 富永 → 坂戸 ◇中園 → 筒針 ◇現河道 → 八帖 → 六ツ美の東側
古墳時代 古代～中世 1399年(応永6) 1452年(享徳元)	河道は 現河道 → 六ツ美の東側 支流として、大井川 → 福岡町 → 菱池 → 羽角町 → 貝吹町 六ツ名堤の築堤 西郷頼頼が岡崎城を築造したとき矢作川の築堤を行う。
1605年(慶長10) 1644年(正保元) 1646年(正保3)	河道は 西浅井 → 小島 → 江原 → 今川 矢作新川の開削、ほぼ現在の河道 根崎堤(米津～鷲津間)完成、油ヶ淵の矢作川との遮断 弓取川の閉塞、矢作古川の川筋 それまでの河道は、小焼野 → 細池 → 道目記町 → 行川 → 赤羽 以後、現在とほぼ同じ河道 矢作川本川、支流ともほぼ現在の河道となる。



本項は以下の資料から引用した。

**[六ツ美南部の歴史・文化を紐解く]**

著者 岡崎市立六ツ美南部小学校 高須 亮平  
発行日 2012(平成24)年3月31日 初版発行  
印刷所 ブラザー印刷株式会社